

若者へのメッセージ 41

劇作家・俳優

渡辺 えり

【第一回】褒め上手

小学生の時、大好きな先生がいました。その先生の教え方は、いわゆる「褒め上手」で、その影響で子供たちは互いの個性を認め合うようになりました。劇作家としての今の私があるのは先生のおかげだと思います。

作文には不正解がない

「ここに一本の蠟燭があります」。担任の太田康夫先生は突然自分の手のひらを私たちに広げて見せました。国語の授業でのことです。

「想像してみてください。この手のひらに一本の蠟燭があることを。その蠟燭はどんな蠟燭ですか？ 蠟燭の炎は何色ですか？ 真っ赤に燃える激しい炎が見えた人。青白い炎が見えた人。幽霊が出てきそうで怖いですね。消えてしまったら芯に煙が揺蕩って（ゆらゆらと揺れ動いて定

まらない様子）見えた人。長く大きな蠟燭の見えた人。またはもう小さくなってなくなりそうな蠟燭が見えた人。いいですか？ そのどれもが正解です。皆さんが想像したものはすべて正しいのです。それが作文です。作文には不正解がない。みんな○なんです。×はないんです」

私が小学三年生の時の作文の授業です。私は太田先生のこの時の言葉を一生忘れることはないでしょう。×のない世界。自分自身が自由な発想のもとに縛られない世界。そんな世界のあることを太田先生は教えてくださいました。

私は幼いころから頭の中で物語を作ることが好きだったので、それからは家族のことや今思っていることなどを作文に書いて先生に提出したのですが、それを先生が大いに褒めてくださり、

渡辺 えり（わたなべ・えり）

劇作家、演出家、俳優、歌手。

本名および旧芸名は、渡辺えり子。

1955年、山形県生まれ。

現在、「オフィス3000」主宰。一般社

団法人日本劇作家協会会長（二期目）。

『ゲゲゲの怪獣が時に揺れるフランク』

で岸田國士戯曲賞（83年）、『嘘の女』

見ぬ海からの手紙』で紀伊國屋演劇賞を受

賞（87年）。俳優としても『おしん』や

『あまちゃん』をはじめ多くのドラマに出

演。映画『Shall We ダンス?』で

は日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受

賞（97年）。他多数の受賞歴を持つ。

コロナ禍により活動が制限される中、女

性劇作家による「女々しき力プロジェクト」

を立ち上げ、エンターテインメントのさら

なる向上のため、演劇活動を積極的に行っ

ている。

また、俳優と並行し歌手としても活躍。

自身の詞の提供も行う。



私はまずまず作文が好きになり、連載小説を書き、イラストなども自分で書いて編集した雑誌を発行したのです。クラスの友達だけが回し読みできる雑誌でした。画用紙を閉じて作ったその雑誌も先生に褒めて貰い、私はいっぺんにクラスの人気者になってしまったのです。歌を歌えば「声が大きくてはつきりしていて美しい」と褒めて貰い、朗読しても褒められる。三年生で担任が太田先生になった途端、私は学校に行くのが楽しくなり、体も丈夫になってきました。

いじめにあい、学校を休む

小学校に入学した頃、田舎の山奥から引越してきたこともあり、友達もできずしかも太っていたためか、同級生たちにひどくいじめられました。バケツを二つ持たされて一人で掃除させられたり、教科書を破られたりとひどいものでした。しばらくすると私の足は痛んで動けなくなり、学校を休むようになったのです。当時は電話もない時代でしたので、母が「体調が悪いのでえり子を休ませます」と書いた手紙を学校に持っていかなければなりません。学校に手紙を持っていく母の後ろ姿を見た途端に私の体はけろりと治ってしまうのです。仮病ではなく本当に足に激痛が走り、登校しなくて

よいとわかると途端に治るのです。登校拒否児童のはしりと言っても良いでしょう。

三年の時のクラス替えにより級友も変わり、担任の先生も変わってすぐの授業のおかげで私はようやく人間になれたのでした。

今も劇作家として舞台を作っているのもこの小学校三年の時の太田康夫先生の作文の授業のおかげではないか？ と思っています。

良いものは良いと評価する力

太田先生は声が大きく、いつも声の大きい、活力あふれる陽気な先生でした。誰でも良いところがあるとすぐに褒めたのです。クラスに色盲の相馬君という優しい性格の男子がいましたが、神社に写生に行った時の相馬君の絵が真先に教室に張り出され金紙が貼られました。先生は「みんな素晴らしい絵だ！ 誰にも描けない凄い絵だぞ！」と大声で言いました。茶色と灰色と黄土色の木々。灰色の鳥居。シュールレアリズムのような個性的な絵画でした。その日から相馬君は人気者になり、みんなが色盲についていろいろと質問するようになりました。友達の個性を知るきっかけになったのです。そして偏見や差別の意識がなく良いものは良いと評価する力をみんなが持てるようになったのではないか？ と思っています。

六年生になる前に先生が異動になってしまい、その時の悲しさ辛さは強いものでした。異動の発表があった講堂で私はいつまでも泣いていました。

六年生の担任はアルコール中毒の不思議な先生で、問題の解答を間違えると金槌で殴られたりと、また体調に異常をきたすような状態になり、その時の先生の言葉は私の戯曲「ゲゲゲのげ」にそのまま書かせていただき、岸田國士戯曲賞を当時の最年少でいただくことになりました。先生の名前の康夫は太田先生からいただいて、後でねずみ男になるユーモラスな部分は太田先生から、残酷な部分は六年生の担任だった先生からいただきました。

昨年太田康夫先生が亡くなり、コロナ禍でしたがお宅まで伺うことができました。90歳とのことですが、まだ若々しく眠るようなお顔で、先生にそっくりな長男の方が私が小学生の頃の話と先生と一緒に撮った写真を見せてくださいました。お嬢さんの名前は智子。当時仲良しかった級友の名前で、智子さんと私のことを太田先生は良く息子さんたちに話していたとのこと。文武両道、ピアノも上手で人柄も抜群の智子さん。少し嫉妬の感情が湧きましたが、こんなエピソードもこんな風にして書けるありがたさを感じています。